南島譚

幸福

中島敦

青空文庫

昔、此の島に一人の極めて哀れな男がいた。年齢を数えるという不自然な習慣が此の辺には無いので、幾歳ということはハッキリ言えないが、余り若くないことだけは確かであった。髪の毛が余り縮れてもおらず、鼻の頭がすっかり潰れてもおらぬので、此の男の醜貌は衆人の顰笑の的となっていた。おまけに唇が薄く、顔色にも見事な黒檀の様な艶が無いことは、此の男の醜さを一層甚だしいものにしていた。此の男は、恐らく、島一番の貧乏人であったろう。ウドウドと称する勾玉の様なものがパラオ地方の貨幣であり、宝であるが、勿論、此の男はウドウドなど一つも持ってはいない。ウドウドも持っていない位だから、之によって始めて購うことの出来る妻をもてる訳がない。たった独りで、島の第一長老の家の物置小舎の片隅に住み、最も卑しい召使として仕えている。家中のあらゆる卑しい勤めが、此の男一人の上に負わされる。怠け者の揃った此の島の中で、此の男一人は怠ける暇が無い。朝はマンゴーの繁みに囀る朝鳥よりも早く起きて漁に出掛ける。手槍で大蛸を突き損って胸や腹に吸い付かれ、身体中腫れ上ることもある。巨魚タマカイに追われて生命からがら独木舟に逃げ上ることもある。盥ほどもある車渠貝に足を挟まれ損ったこともある。午になり、島中の誰彼が木蔭や家の中の竹床の上でうつらうつら午睡をとる時も、此の男ばかりは、家内の清掃に、小舎の建築に、椰子蜜採りに、椰子縄綯いに、屋根葺きに、家具類の製作に、目が廻る程忙しい。此の男の皮膚はスコールの後の野鼠の様に絶えず汗でびっしょり濡れている。昔から女の仕事と極められている芋田の手入の外は、何から何迄此の男が一人で働く。陽が西の海に入って、麺麭の大樹の梢に大蝙蝠が飛び廻る頃になって、漸く此の男は、犬猫にあてがわれるようなクカオ芋の尻尾と魚のあらとにありつく。それから、疲れ果てた身体を固い竹の床の上に横たえて眠る——パラオ語でいえばモ・バズ、即ち石になるのである。

彼の主人たる此の島の第一長老はパラオ地方——北は此の島から南は遠くペリリュウ島に至る——を通じて指折の物持ちである。此の島の芋田の半分、椰子林の三分の二は此の男のものに属する。彼の家の台所には、極上鼈甲製の皿が天井迄高く積上げられている。彼は毎日海亀の脂や石焼の仔豚や人魚の胎児や蝙蝠の仔の蒸焼などの美食に※いているので、彼の腹は脂ぎって孕み豚の如くにふくらんでいる。彼の家には、昔その祖先の一人がカヤンガル島を討った時敵の大将を唯の一突きに仕留めたという誉れの投槍が蔵されている。彼の所有する珠貨は、玳瑁が浜辺で一度に産みつける卵の数ほど多い。その中で一番貴いバカル珠に至っては、環礁の外に跳梁する鋸鮫でさえ、一目見て驚怖退散する程の威力を備えている。今、島の中央に巍然として屹立する・蝙蝠模様で飾られた・反り屋根の大集会場を造ったのも、島民一同の自慢の種子である蛇頭の真赤な大戦舟を作ったのも、凡て此の大支配者の権勢と金力とである。彼の妻は表向きは一人だが、近親相姦禁忌の許す範囲に於いて、実際は其の数は無限といってよい。

此の大権力者の下僕たる・哀れな醜い独り者は、身分が卑しいので、直接の主人たる此の第一長老は固より、第二第三第四ルバックの前を通る時でも、立って歩くことは許されなかった。必ず匍匐膝行して過ぎなければならないのである。もし、独木舟に乗って海に

出ている時に長老の舟が近付こうものなら、賤しき男は独木舟の上から水中に跳び込まねばならぬ。舟の上から挨拶する如き無礼は絶対に許されない。或る時そうした場合にぶつかり、彼が謹しんで水中に飛び込もうとすると、一匹の鱶の姿が目に入った。彼が躊躇するのを見た長老の従者が、怒って棒切を投げつけ、彼の左の目を傷けた。已むを得ず、彼は鱶の泳いでいる水の中に跳び込んだ。其の鱶がもう三尺大きい奴だったら、彼は、足の指を三本喰切られただけでは済まなかったに違いない。

　此の島から遥か南方に離れた文化の中心地コロール島には、既に、皮膚の白い人間共が伝えたという悪い病が侵入して来ていた。その病には二つある。一つは、神聖な天与の秘事を妨げる怪しからぬ病であって、コロールでは男が之にかかる時は男の病と呼ばれ、女がなる場合は女の病といわれる。もう一つの方は、極めて微妙な・徴候の容易に認め難い病気であって、軽い咳が出、顔色が蒼ざめ、身体が疲れ、痩せ衰えて何時の間にか死ぬのである。血を喀くこともあれば、喀かないこともある。此の話の主人公たる哀れな男は、どうやら、此の後の方の病気にかかっていたらしい。絶えず空咳をし、疲れる。アミアカ樹の芽をすり潰して其の汁を飲んでも、蛸樹の根を煎じて飲んでも、一向に効き目が無い。彼の主人は之に気が付き、哀れな下男が哀れな病気になったことを大変ふさわしいと考えた。それで、此の下男の仕事は益々ふえた。

　哀れな下男は、しかし、大変賢い人間だったので、己が運命を格別辛いとは思わなかった。己の主人が如何に苛刻であっても、尚、自分に、視ることや聴くことや呼吸すること迄禁じないから有難いと思っていた。自分に課せられる仕事が如何に多くとも、なお婦人の神聖な天職たる芋田耕作だけは除外されていることを有難く思おうと考えた。鱶のいる海に跳び込んで足の指三本を失ったことは不幸のようだが、それでも脚全体を喰切られなかったことを感謝しよう。空咳の出る疲れ病に罹ったことも、疲れ病と同時に男の病に迄罹る人間もあることを思えば、少くとも一つの病だけは免れたことになる。自分の頭髪が乾いた海藻の様に縮れていないことは明らかに容貌上の致命的欠陥には違いないが、荒れ果てた赭土丘の様に全然頭髪の無い人間だって俺は知っている。自分の鼻が踏みつけられたバナナ畑の蛙のように潰れていないことも甚だ恥ずかしいことは確かだが、しかし、全然鼻のなくなった腐れ病の男も隣の島には二人もいるのだ。

　だが、足るを知ること斯くの如き男でも、やはり、病が酷いよりも軽い方がいいし、真昼の太陽の直射の下でこき使われるよりも木蔭で午睡をした方が快い。哀れな賢い男も、時には、神々に祈ることがあった。病の苦しみか労働の苦しみか、どちらかを今少し減じ給え。もし此の願が余りに慾張り過ぎていないなら、何卒、と。

　タロ芋を供えて彼が祈ったのは、椰子蟹カタツツと蚯蚓ウラズの祠である。此の二神は共に有力な悪神として聞こえている。パラオの神々の間では、善神は供物を供えられることが殆ど無い。御機嫌をとらずとも祟をしないことが分かっているから。之に反して、悪神は常に鄭重に祭られ多くの食物を供えられる。海嘯や暴風や流行病は皆悪神の怒から生ずるからである。さて、力ある悪神・椰子蟹と蚯蚓とが哀れな男の祈願を聞入れたのかどうか、とにかくそれから暫くして、或晩この男は妙な夢を見た。

　其の夢の中で、哀れな下僕は何時の間にか長老になっていた。彼

の坐っているのは母屋の中央、家長のいるべき正座である。人々は皆唯々として彼の言葉に従う。彼の機嫌を損ねはせぬかと惴々焉として懼れるものの如くである。彼には妻がある。彼の食事の支度に忙しい娣女も大勢いる。彼の前に出された食卓の上には、豚の丸焼や真赤に茹だったマングローブ蟹や正覚坊の卵が山と積まれている。彼は事の意外に驚いた。夢の中ながら、夢ではないかと疑った。何か不安で仕方が無い。

翌朝、目が醒めると、彼はやはり屋根が破れ柱の歪んだ何時もの物置小舎の隅に寝ていた。珍しく、朝鳥の鳴く音にも気付かず寝過ごしたので、家人の一人に酷く叩かれた。

次の夜、夢の中で彼は又長老になった。今度は彼も前夜程驚かない。下僕に命令する言葉も前夜よりは大分横柄になって来た。食卓には今度も美味佳肴が堆く載っている。妻は筋骨の逞しい申し分の無い美人だし、章魚の木の葉で編んだ新しい呉蓙の敷き心地もヒヤヒヤと冷たくて誠に宜しい。しかし、朝になると、依然として汚ない小舎の中で目を醒ました。一日中烈しい労働に追い使われ、食物としてはクカオ芋の尻尾と魚のあらとしか与えられないことも今迄通りである。

次の晩も、次の次の晩も、それから毎晩続いて、哀れな下僕は夢の中で長老になった。彼の長老ぶりは次第に板について来た。御馳走を見ても、もう初めの頃のように浅間しくガツガツするようなことは無い。妻との間に争いをしたことも度重なった。妻以外の女に手出しが出来ることを知ってからも久しくなる。島民等を頤使して、舟庫を作らせたり祭祀をとり行ったりもした。司祭に導かれて神前に進む彼の神々しさに、島民共は斉しく古英雄の再来ではないかと驚嘆した。彼に仕える下僕の一人に、昼間の彼の主人たる第一長老と覚しき男がいる。此の男の彼を怖れる様といったら、可笑しい位である。それが面白さに、彼は、第一長老に似た此の下僕に一番酷い労働をいいつける。漁もさせれば、椰子蜜採りもさせる。我が乗る舟の途に当るからとて、此の下僕を独木舟から鱶の泳ぐ水中に跳び込ませたこともある。哀れな下僕の慌てまどい畏れる様が、彼にいたく満足を与える。

昼間の劇しい労働も苛酷な待遇も最早彼に嘆声を洩らさせることはない。賢い諦めの言葉を自らに言って聞かせる必要もなくなった。夜の楽しさを思えば、昼間の辛労の如き、ものの数ではなかったからである。一日の辛い仕事に疲れ果てても、彼は世にも嬉しげな微笑を浮べつつ、栄燿栄華の夢を見るために、柱の折れかかった汚ない寝床へと急ぐのであった。そういえば、夢の中で摂る美食の所為であろうか、彼は近頃めっきり肥ってきた。顔色もすっかり良くなり、空咳も何時かしなくなった。見るからに生き生きと若返ったのである。

丁度哀れな醜い独身者の下僕が斯うした夢を見始めた頃から、一方、彼の主人たる富める大長老も亦奇態な夢を見るようになった。夢の中で、貴き第一長老は惨めな貧しい下僕になるのである。漁から椰子蜜採りから椰子縄作りから麺麭の実取りや独木舟造りに至る迄、ありとあらゆる労働が彼に課せられる。こう仕事が多くては、無数に手の生えている蜈蚣でも遣り切れまいと思われる程だ。其等の用をいいつける主人というのが、昼間は己の最も卑しい下僕である筈の男である。之が又ひどく意地悪で、次から次へと無理をいう。

大蛸には吸い付かれ、車渠貝には足を挟まれ、鱶には足指を切られる。食事はといえば、芋の尻尾と魚のあらばかり。毎朝、彼が母屋の中央の贅沢な呉莖の上で醒を覚ます時は、身体は終夜の労働にぐったりと疲れ、節々がズキズキと痛むのである。毎晩斯ういう夢を見ている中に、第一長老の身体から次第に脂気がうせ、出張った腹が段々しぼんで来た。実際芋の尻尾と魚のあらばかりでは、誰だって痩せる外はない。月が三回盈欠する中に長老はみじめに衰えて、いやな空咳までするようになった。

竟に、長老が腹を立てて下僕を呼びつけた。夢の中で己を虐げる憎むべき男を思いきり罰してやろうと決心したのである。

所が、目の前に現れた下僕は、嘗ての痩せ衰えた・空咳をする・おどおどと畏れ惑う・哀れな小心者ではなかった。何時の間にかデップリと肥り、顔色も生き生きとして元気一杯に見える。それに、其の態度が如何にも自信に充ちていて、言葉こそ叮寧ながら、どう見ても此方の頤使に甘んずるものとは到底思われない。悠揚たる其の微笑を見ただけで、長老は相手の優勢感にすっかり圧倒されて了った。夢の中の虐待者に対する恐怖感迄が甦って来て彼を脅した。夢の世界と昼間の世界と、何れがより現実なのかという疑が、チラと彼の頭を掠めた。痩せ衰えた自分の如き者が今更咳をしながら此の堂々たる男を叱り付けるなどとは、思いも寄らぬ。

長老は、自分でも予期しなかった程の慇懃な言葉で、下男に向い、彼が健康を回復した次第を尋ねた。下男は詳しく夢のことを語った。如何に彼が夜毎美食に※き足るか。如何に婢僕にかしずかれて快い安逸を娯しむか。如何に数多の女共によって天国の楽しみを味わうか。

下僕の話を聞き終って、長老は大いに驚いた。下男の夢と己の夢との斯くも驚くべき一致は何に基づくのか。夢の世界の栄養が醒たる世界の肉体に及ぼす影響は、又斯くの如く甚だしいのか。夢の世界が昼の世界と同じく（或いはそれ以上に）現実であることは、最早疑う余地が無い。彼は、恥を忍んで、下男に己が毎夜の夢のことを告げた。如何に自分が夜毎劇しい労働を強いられるか。如何に芋の尻尾と魚のあらとだけで我慢せねばならぬか。

下男はそれを聞いても一向に驚かぬ。さもあろうと云った顔付で、疾くに知っていた事を聞くように、満足げな微笑を湛えながら鷹揚に頷く。其の顔は、誠に、干潟の泥の中に満腹して眠る海鰻の如く、至上の幸福に輝いている。この男は、夢が昼の世界よりも一層現実であることを既に確信しているのであろう。アアと心からの溜息を吐きながら、哀れな富める主人は貧しく賢い下僕の顔を嫉ましげに眺めた。

×　　×　　×

右は、今は世に無きオルワンガル島の昔話である。オルワンガル島は、今から八十年ばかり前の或日、突然、住民諸共海底に陥没して了った。爾来、この様な仕合わせな夢を見る男はパラオ中にいないということである。

青空文庫情報

底本：「中島敦全集2」ちくま文庫、筑摩書房
　　1993（平成5）年3月24日第1刷発行
初出：「南島譚」問題社
　　1942（昭和17）年11月
入力：ちょも
校正：田中久絵
1999年8月6日公開
2014年8月2日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

南島譚

幸福

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

著者　　中島敦
URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/